

研究プロジェクト総合報告
研究プロジェクト論文

大学1年次生の英語学習に対する動機

橋本 秀実

同志社女子大学・看護学部・看護学科・准教授

Comparing First-Year University Students' Motivation Toward Learning English

HASHIMOTO Hidemi

Department of Nursing, Faculty of Nursing,
Doshisha Women's College of Liberal Arts, Associate professor

Abstract

This study aimed to clarify first-year university students' motivation to learn English. A total of six hundred students from ten departments at the DWCLA participated in the study. A questionnaire on motivation was created and employed in this study. Factor analyses produced seven factors: "Interest in the English language and English community," "Self-efficacy," "Positive feelings toward people or culture from English speaking regions," "Instrumentality approach," "For the joy of learning English," "Ought-to second language (L2) self," and "Anxiety of speaking English." Students in the Department of International Studies scored the highest on the total score. They also scored the highest in the subscales, except in "Ought-to L2 self" and "Anxiety of speaking English." There was no significant difference in the "Anxiety of speaking English" among the departments; therefore, measures are required to help students from all departments relax when speaking English. The score on "Instrumentality approach" in the Nursing Department was the lowest. Therefore, we need to take a strategic approach to make Nursing Department students realize the necessity of English in the nursing profession.

1 研究の背景と目的

2020年初めからの新型コロナウイルス(Covid-19)感染症の爆発的流行は、わたしたちがまさにグローバル社会に生きていることを感じさせた。世界人口の5人に一人は英語を話すと言われる現在、国際社会における共通言語としての英語の存在は大きい。それを受けて、

日本社会における英語の必要性も高まってきている。社内英語公用語化を進めている企業も増え、小学校における英語は2020年から5年生以上で教科化された。政府は「グローバル人材育成戦略」に実践的な英語教育の強化、大学教育システムの確立等をあげており、大学における英語教育のより一層の充実が求められている。今後の英語教育を考えるうえで、学生の英語学

習動機を明らかにすることは、重要であると考
える。

これまでの英語学習動機に関する研究では、
社会教育モデルを軸として統合的動機や道具的
動機が影響するとされた。また、心理学的な面
を外国語学習に統合させた内発的動機と外発的
動機に分けられるものがある（廣森、2016；林、
2011）。これらのモデルを基盤に大学入試を経
て入学した学生が1年間の学修を終える時点で
どのような学習動機を持っているかをとらえる
ことで、初年次の学びを支え、次の年次につな
げる英語教育を考えることができる。また、本
学は6学部からなる総合大学であり、学生全体
の英語学習動機をとらえ、学科ごとの学習動機
の比較をすることで、学習支援を考える一助と
なる。そこで、大学1年次生の英語学習動機を
明らかにすることを目的として研究を実施した。

なお、本論文に先立ち、国際教養学科と看護
学科の2学科間の英語学習動機とその比較を検
討した論文を公表した（飯田・佐伯・今井ほか、
2019；飯田、成橋、橋本ほか、2020）。本論文
は同研究データを10学科間で検討したものであ
る。

2 研究方法

本研究の参加者は、同志社女子大学1年次生
である。2019年1月、10学科の32クラスの授業
担当者が授業最終日に質問紙を配付し、回答を
依頼した。調査に先立ち、1学科において同内
容の調査を実施したため、本研究では10学科の
みを対象とした。

質問項目は先行研究を参考に52項目の質問を
作成した。内容は①英語学習の目的・努力、②
理想自己、③義務自己、④文化に対する関心、
⑤道具的接近、⑥道具的回避、⑦L2コミュニ
ティへの態度、⑧統合性、⑨自信・不安、⑩家
族社会的要因、⑪英語学習に対する態度、⑫コ
ミュニケーションへの意図、⑬自己効力感であ
る（Taguchi, T., Magid, M., & Papi, M.,
2010）。質問の回答はLickert scale 4件法で「全
くそう思わない」、「そう思わない」、「そう思う」、

「全くそう思う」の選択式とした。

分析に当たっては、52項目の回答に欠損のあ
るものは除いた。その後、尺度項目ごとに記述
統計量を算出し、天井効果・床効果を示した項
目を除外、探索的因子分析（最尤法、プロマッ
クス回転）を行った。因子負荷量が0.4に満た
ないものを除き、因子分析を繰り返し、因子構
造を確定後、項目内容から因子名を付けた。さ
らにクロンバックの α を算出して内的整合性を
確認した。

学科間の比較ではクラスカル・ウォリスの検
定を実施し、有意な差があったものについてペ
アごとに多重比較を行った。

3 結果

調査票は1004部回収し、因子項目に欠損のあ
った67部を除いて、937部を分析対象とした。学
科内訳は、看護学科74部、国際教養学科82部、
現代こども学科104部、社会システム学科81部、
医療薬学科120部、メディア創造学科120部、音
楽学科96部、日本語日本文学科112部、人間生
活学科55部、食物栄養科学科93部であった。

天井効果については平均値と標準偏差の和が
項目の最大得点4点を超える1項目を除外し、
床効果については平均値と標準偏差の和が項目
の最少得点1点を下回る3項目を除外した。

残った48項目で、最尤法、プロマックス回転
を使用して因子分析を行った。因子負荷量が.40
未満の項目を除き、因子分析を繰り返した結果、
37項目7因子が抽出された。KMO 測度は.952、
バートレットの球面性測定は $p < .01$ で
Cronbach の α は全体で.949であった。回転
前の7因子によって全分散を説明する割合は
66.49%であった。因子分析結果を表1に示す。

第1因子は〈英語のネイティブ・スピーカー
のコミュニティに入りたいと思う〉、〈英語圏か
らの人と会うのが好きである〉、〈英語圏の人々
のことについてもっと知りたい〉など15項目か
ら成り、【英語や英語コミュニティへの興味・
関心】と命名した。第2因子は〈予期せぬ出来
事に遭遇しても、私は効率よく対処できる自信

表1 因子分析結果

因子名	項目内容	因子						
		I	II	III	IV	V	VI	VII
英語や英語コミュニティへの興味・関心	英語のネイティブ・スピーカーのコミュニティに入りたいと思う	0.950	-0.066	-0.074	0.034	-0.078	0.015	-0.027
	日常生活でもっと英語を使いたいと思う	0.892	0.018	-0.148	0.104	-0.042	-0.115	0.162
	授業で英語をもっと使いたい	0.888	-0.072	-0.237	0.012	0.186	-0.044	0.071
	将来英語圏に住みたい	0.771	-0.161	0.122	-0.099	-0.047	0.108	-0.112
	私は将来仕事や留学で海外にずっと住みたいので、英語の勉強は大切だ	0.711	-0.130	0.052	-0.089	-0.015	0.174	-0.069
	英語のネイティブ・スピーカーに自分から話しかけたいと思う	0.700	0.194	-0.052	0.000	-0.047	0.007	-0.107
	英語圏からの人と会うのが好きである	0.644	0.050	0.275	-0.018	-0.026	-0.035	-0.091
	英語圏の人々のことについてもっと知りたい	0.642	-0.054	0.299	-0.052	0.013	-0.010	0.128
	英語のネイティブ・スピーカーのように話せるようになりたい	0.611	-0.013	0.027	0.340	-0.081	-0.109	0.102
	英語を話す人が好きである	0.585	0.027	0.269	0.048	-0.049	-0.040	-0.041
英語が話せる自分を想像できる	0.514	0.349	-0.090	-0.129	0.011	0.139	-0.086	
英語を学ぶことは面白い	0.508	0.072	-0.046	0.040	0.355	-0.033	0.054	
外国人の友達や仲間と英語で話す自分を想像できる	0.506	0.313	-0.058	-0.061	0.008	0.133	-0.158	
英語圏の文化に興味・関心がある	0.494	0.001	0.405	-0.033	-0.007	-0.062	0.113	
英語圏へ旅行することが好きである	0.445	-0.046	0.328	0.037	-0.021	0.042	-0.150	
自己効力感	予期せぬ出来事に遭遇しても、私は効率よく対処できる自信がある	-0.085	0.846	0.040	-0.022	-0.088	-0.004	-0.098
	私は問題に直面しても、いつもいくつかの解決策を見つけることができる	-0.133	0.830	0.078	0.019	0.010	-0.026	0.047
	目的を見失わず、ゴールを達成することは私にとって難しいことではない	-0.008	0.645	-0.059	-0.014	0.007	0.048	0.098
	私は一生懸命がんばれば、困難な問題でもいつも解決することができる	0.077	0.570	0.050	0.077	0.043	-0.067	0.037
英語圏の人や文化への好意	英語圏の映画が好きだ	-0.080	0.043	0.696	0.009	0.068	0.010	0.001
	英語圏の音楽が好きだ	-0.008	0.014	0.694	-0.057	0.116	-0.017	0.045
	英語圏に住んでいる人が好きである	0.301	0.032	0.542	0.033	-0.031	0.035	0.005
道具的接近	将来のキャリアで失敗しないためにも英語を勉強しなければならない	-0.074	-0.036	-0.090	0.920	0.046	0.162	-0.078
	英語の運用能力は就職後の昇進に必要なので、英語の勉強は大切だ	-0.031	-0.011	-0.002	0.904	0.039	0.020	-0.120
	私も周りの多くの人が英語の学習は有益であると考えている	0.123	0.065	0.080	0.517	0.008	0.021	0.060
	英語ができたらグローバルな社会で働くことができるので、英語の勉強は大切だ	0.369	0.036	0.083	0.404	-0.017	-0.041	0.101
英語を学ぶ喜び	今大学で英語の授業を楽しんで受講している	-0.046	-0.045	0.020	0.097	0.799	-0.079	-0.051
	いつも英語の授業を楽しみにしている	-0.005	0.013	0.042	-0.068	0.797	0.087	0.004
	英語の授業の雰囲気が好きである	-0.074	-0.052	0.178	0.051	0.718	0.054	-0.044
義務自己	英語を学ぶことを楽しんでいる	0.408	0.123	-0.033	-0.055	0.502	-0.032	0.026
	親の期待に応えるために英語を学んでいる	0.001	-0.028	-0.005	0.030	0.033	0.751	0.067
	私の周りの人々が期待するので、英語の勉強をする	0.128	0.014	-0.053	-0.063	0.046	0.707	0.066
	親が私が教養ある人になるためには英語を学ばなければならないと考えている	-0.091	0.071	0.028	0.223	-0.039	0.501	0.079
英語を話すときの緊張	親が英語の勉強を勧めている	0.033	-0.020	0.056	0.216	-0.058	0.443	0.011
	英語のネイティブスピーカーと話すとき緊張する	-0.102	0.087	0.039	-0.023	-0.038	0.074	0.795
	英語で道を聞かれると緊張する	0.000	-0.044	-0.026	-0.025	0.048	-0.010	0.678
教室で英語を話すとき緊張する	0.038	-0.031	0.043	-0.113	-0.088	0.121	0.641	
回転前の因子寄与率		38.31%	7.95%	5.47%	4.31%	3.83%	3.53%	3.09%

がある)、〈私は問題に直面しても、いつもいくつかの解決策を見つけることができる〉など4項目から成り、【自己効力感】と命名した。第3因子は〈英語圏の映画が好きだ〉や〈英語圏に住んでいる人が好きである〉など3項目から成り、【英語圏の人や文化への好意】と名付けた。第4因子は、〈将来のキャリアで失敗しないためにも英語を勉強しなければならない〉や〈英語の運用能力は就職後の昇進に必要なので、英語の勉強は大切だ〉など4項目から成り、【道具的接近】と名付けた。第5因子は〈今大学で英語の授業を楽しんでいる〉や〈いつも英語の授業を楽しみにしている〉など4項目から成り、【英語を学ぶ喜び】と命名した。第6因子は〈親の期待に応えるために英語を学んでいる〉や〈私の周りの人が期待するので、英語の勉強をする〉など4項目から成り、【義務自己】と命名した。第7因子は〈英語のネイティブ・スピーカーと話すとき緊張する〉や〈英語で道を聞かれると緊張する〉など3項目から成り、【英語を話すことの緊張】と名付けた。

学科ごとに因子総得点および下位尺度得点を算出し、クラスカル・ウォリス検定を行った結

果を表2に示す。因子総得点、下位尺度得点について、【英語を話すことの緊張】以外のすべてについて学科により有意な差があった。有意な差がみられる学科を見るためにペアごとの多重比較を行った結果、因子総得点では、すべての学科に比べて国際教養学科が高かった。加えて、医療薬学科と食物栄養科学科は現代こども学科に比べ有意に高かった。下位尺度得点では【英語や英語コミュニティへの興味関心】、【自己効力感】、【英語圏の人や文化への興味関心】、【道具的接近】、【英語を学ぶ喜び】については国際教養学科が他のすべての学科に対して有意に高かった。また、【義務自己】については国際教養学科が社会システム学科と医療薬学科以外の学科に対して有意に高かった。国際教養学科を除く学科間比較について以下に述べる。【英語圏の人や文化への興味関心】については、現代こども学科は社会システム学科と看護学科以外の学科と比べて有意に低く、食物栄養科学科、人間生活学科、音楽学科は社会システム学科に比べて有意に高かった。【道具的接近】については、看護学科は他のすべての学科に比べて有意に低かった。【英語を学ぶ喜び】は医療薬学

表2 学科別因子得点平均

因子	学科										全体	p値 ^a
	看護	国際	現代こども	社会システム	薬学	メディア創造	音楽	日本語日本文学	人間生活	食物栄養		
英語や英語コミュニティへの興味・関心	2.38	3.35*	2.31	2.31	2.38	2.33	2.41	2.33	2.37	2.46	2.45	<.001
自己効力感	2.30	2.71*	2.20	2.31	2.28	2.28	2.23	2.19	2.21	2.27	2.29	<.001
英語圏の人や文化への好意	2.78	3.38*	2.54	2.60	2.81	2.8	2.89	2.77	2.86	2.84	2.82	<.001
道具的接近	2.83**	3.58*	3.08	3.14	3.07	3.14	3.06	3.06	3.10	3.17	3.12	<.001
英語を学ぶ喜び	2.28	3.12*	2.19	2.17	2.48	2.09	2.26	2.17	2.40	2.29	2.33	<.001
義務自己	2.19	2.57	2.21	2.42	2.39	2.19	2.19	2.26	2.20	2.28	2.29	0.003
英語を話すことの緊張	2.95	2.74	2.98	2.95	3.06	3.00	2.90	3.02	3.10	3.00	2.97	0.152
因子総得点平均	2.47	3.15*	2.43	2.47	2.55	2.46	2.5	2.46	2.52	2.55	2.49	<.001

a:クラスカルウォリス検定

* ペアで多重比較をした結果、すべての学科に比べて有意に高い (P<.05)

** ペアで多重比較をした結果、すべての学科に比べて有意に低い (P<.05)

科がメディア創造学科、日本語日本文学科、社会システム学科、食物栄養科学科に比べて高かった。ほかに、音楽学科、看護学科、食物栄養科学科、人間生活学科はメディア創造学科に比べて高く、人間生活学科は日本語日本文学科に比べて高かった。【義務自己】は社会システム学科は現代こども学科、音楽学科、看護学科、メディア創造学科に比べて有意に高く、医療薬学科は現代こども学科、音楽学科に比べて高かった。

4 考察

本学10学科の学生の英語学習動機は【英語や英語コミュニティへの興味関心】、【自己効力感】、【英語圏の人や文化への好意】、【道具的接近】、【英語を学ぶ喜び】、【義務自己】、【英語を話すことの緊張】の7因子で説明された。つまり【英語や英語コミュニティへの興味関心】があり、【英語圏の人や文化への好意】があることが学習動機を高め、【英語を学ぶ喜び】とやればできるという【自己効力感】をもって学んでいる。さらに将来のことや親の期待を考え【道具的接近】と【義務自己】という外発的動機もある。一方で【英語を話すことへの緊張】もある。

学科間の比較では、当然のことながら英語圏への留学を必修としている国際教養学科の学生の英語学習動機はすべての学科に比べて高かった。下位尺度においても有意差があった6因子のうち5因子において国際教養学科が他のすべての学科より高かった。【義務自己】については医療薬学科と社会システム学科においてより親や周りの期待を強く感じていることがわかった。【英語を話すことの緊張】についてのみ学科間での差がなかったことから、英語を話すトレーニングを通じてよりリラックスして話せるようにする方策が共通して求められていると言える。

医療薬学科は親や周りの期待を感じつつも英語を学ぶ喜びも感じられている。この学科では薬学英語を必修科目としており、より、身近に英語を感じられているのではないかと考える。

看護学科では将来のために英語が必要とは感じていない。臨床でナースとして働くうえで英語が必要な場面はそれほど多いわけではなく、それ以上に専門職として専門科目の学修の必要性を感じているのだと考えられる。グローバル社会において、国際共通語としての英語を学ぶことで看護の最新のエビデンスを得られることや看護研究が進められることについて学生が実感するような手立てを考える必要がある。しかしながら、他の内発的動機に分類される因子について他学科に比べて低いわけではないということから、看護学科の英語学習動機が英語の習得にマイナスの影響を与えるわけではないことは付け加えたい。英語を学ぶ喜びを感じている学科もあれば、そうではない学科もあった。その要因はこの調査からは明らかではない。英語への苦手意識の多くは大半が大学入学前に芽生えていると考えられるが、今後の英語の授業の工夫が一層求められる。

5 結論

本学10学科の学生の英語学習動機は【英語や英語コミュニティへの興味関心】、【自己効力感】、【英語圏の人や文化への好意】、【道具的接近】、【英語を学ぶ喜び】、【義務自己】、【英語を話すことの緊張】の7因子で説明された。

因子総得点では、すべての学科に比べて国際教養学科が高かった。下位尺度得点では【英語や英語コミュニティへの興味関心】、【自己効力感】、【英語圏の人や文化への興味関心】、【道具的接近】、【英語を学ぶ喜び】については国際教養学科が他のすべての学科に対して有意に高かった。また、【義務自己】については国際教養学科が社会システム学科と医療薬学科以外の学科に対して有意に高く、改めて留学を前提として入学してきた学生の英語学習動機の高さが確認された。【英語を話すことの緊張】についてのみ学科間での差がなかったことから、英語を話すトレーニングを通じてよりリラックスして話せるようにする方策が共通して求められているといえる。看護学科はすべての学科より【道具

的接近】が低く、将来のために英語の勉強は大切だと考える学生は少なかった。看護専門職としての英語の必要性を実感できるような働きかけが必要である。

文献

グローバル人材育成推進会議 (2012). グローバル人材育成戦略 (グローバル人材育成推進会議 審議まとめ).

<https://www.kantei.go.jp/jp/singi/global/1206011matome.pdf> (2021年2月22日アクセス)

林日出男 (2011). 動機づけ視点で見る日本人の英語学習—内発的・外発的動機づけを軸に—. 金星堂.

廣森友人 (2016). 英語学習のメカニズム—第二言語習得研究に基づく効果的な勉強法—. 大修館書店.

飯田毅, 佐伯林規江, 今井由美子, 橋本秀実, 成橋和正 (2019). 英語を専門としない大学生の英語学習に対する動機—英語専門学部の学生との比較を通して—. JACET 第58回国際大会, 名古屋工業大学

飯田毅, 成橋和正, 橋本秀実, 佐伯林規江, 今井由美子, 高橋玲, 若本夏美 (2020). 本学大学1年次生の英語学習に対する動機—国際教養学科と看護学科との比較を通して—. 同志社女子大学総合文化研究所紀要第37巻, 1-20.

Taguchi, T., Magid, M., & Papi, M. (2010). The L2 motivational Self System among Japanese, Chinese, and Iranian Learners of English: A comparative Study. In Dornyei, Z. & Ushioda, E. (Eds.), *Motivation, Language, Identity and the L2 Self*. (pp.66-97). Bristol: Multilingual Matters.